
心の葉 廻る空

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の葉 廻る空

【Nコード】

N5200B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

忙しい。夏は忙しい。猫がうらやましいよ。って、そんなあたしにも親友がいる。

忙しい。非常に忙しい。わたしは今非常に忙しいわけ。わかるか、猫！

ーって、そんなばかなことしている場合じゃないんだ。とにかく、この忙しい日にバイトが二人もやめてしまった。世間でいう夏休みがはじまって、さあ、いよいよ今年も忙しくなるぞってときに。きつと、店長のせいだ。店長があんなにふんぞり返ってるから若いバイト君の癪に障ったんだ。口だけでなんにもしないあの社長が。あー、もう。それに慣れているわたしもわたしだけ。

とにかく、夏は常時ギンギンにクーラーをきかせて、アイスでもいかがつすかーっていうこの態度が自分の首を締め付けている。おまけにこのコンビニはプールにも近いし、花火に最適な河原にも近い。あー、もう。儲かってしょうがない。

「ちょっとお前、酒買いき」

「ほら、お菓子はいいの！」

「パン：パンかああああ」

「飲むヨーグルトってあるかな：」

なんだよ、それ。うるさいってば。ついでになんども出入りするし、外からきた人は熱気むんむんで暑い！　だけど、だからって飲み物の棚を開け放つなってのに：。

「つと、二千三百四十四円になります」

「：あつ、あと唐揚げください」

「あげません。言うの遅いです」

なんていえるはずもなく悲しみの笑顔で別の袋に唐揚げを入れる。ああ、もう。これ、あと何回やればいいんだろう。めまいがしないのが不思議だった。

「ちよつと、これ賞味期限切れてるじゃないの！」

うわっ、まじですか。賞味期限切れてるのはあなたの顔ですよって

いいなくなるおばさんが割り込んであたしに言ってきた。あたしはそれを受け取って確認するけれど、確かにそのサラダは賞味期限が一日過ぎたものだった。よく気づいたなってくらいに細かい字だったけど。

「申し訳ございません。少々お待ちください。こちら、おつりの八十円になります」

あたしはとりあえず待ちぼうけていたお客さんにおつりを渡して、棚にそのサラダを並べていた店長を呼びにレジをでた。さっきまで並んでいたお客さんはおばさんの大声を聞いてもう一つのレジの列へと並びなおしていた。賢い。

「あの、店長。そのサラダ買った人が賞味期限切れてるって怒ってるんですけど…」

「…まいったな。じゃあ、とりあえず君はこれ並べておいて。僕がレジいくから。…もしわけございません、お客様！」

客相手だと店長はいやに腰が低い。くねくねと普通ならぎやくにむかつくくらいに腰が低い。おばさんはちょっと勝気な笑顔を浮かべた。

あたしはそれを横目に問題のサラダと同じ種類のものをせっせと棚に並べる。こんなもの機械だってできるって単純作業。だけど、あたしはとんでもないことに気がついた。

「これ、三個に一個くらい賞味期限切れてるし！」

あー、もう。まじですか。つい口にだしてしまった。たまたま誰もーというかあたしが邪魔で誰も近くにいなかったのは不幸中の幸いだ。

これも、これも、これもか…。

あたしは仕方なく五個ほど賞味期限切れのものをピックアップして、こいつがいなければ！とむかつてそれらをゴミ袋に入れた。こんなもの、捨ててしまえ！

店の裏の路地にはさっき見た猫がちょこんと座っていた。なんだか、ゆったりとしていて幸せそう。それにとてもかわいい。

「でもね、君にあげれるもの、ないの。ごめんね」

こんな小さな命も幸せにできないってか。あー、もう。ごめんなさい。

裏口から戻ると以外に店が涼しいということに気づいた。なんだから、気持ちがいい。ーちよっと、休んじやおっかな。

スタッフオンリーの扉の向こう。ドアのガラスはマジックミラーになっていて、こっちは忙しい店内が見える。ちよっと、一服だけね。こういうときに弱い人は自分を積極的に肯定してしまう。だって、疲れたもん。もう十分頑張ったじゃんか。それは全部、言い訳。

イスに腰掛けてなんとなく開いた自分の携帯に電話がきていた。友人ーいや、高校からの親友からだ。ああ、こいつもしかしたら。いつもあたしがこの時間帯にバイトなのを親友は熟知している。それでも電話をしてしまうって時はきつと何かがあるときだ。そして、何かというのは必ず彼氏とのケンカだ。もう出合って七年。三年間は二人と一緒に過ごしていたので大体わかる。

さすがに電話をするわけにはいかないわたしはメールを書いた。

「自分に素直になるがいい」

二人ってことでさくらんぼの絵文字を添えた。

きつとこの一言ですぐに仲直りしちゃうんだろうな。あいつらの愛は本物なわけで。ーってあれ、今、親友の笑顔が見えた。気のせいかな。

「次の人どうぞー」

店長の声。あー、もう。働きますよ。休みなんて終わり！ さあ、仕事、仕事！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200b/>

心の葉 廻る空

2011年1月29日03時00分発行